掌中佛語七部集 上

桂漸逸人誌

春乃月

照る日もくもる雨の空おもしろき
波ものどかなる風のうらうらと
いとのどかなる春のけしきをおもひやる

二ノ月十八日

まがきやくまもる雨のしづくの仔鹿哉　荷分
きくらげや一つ二つ三つ四つ　重五
おぼろ月一村ごとに犬の声　雨桐
鎧なるらの一尖の雪　李風
古木風もよろぼふ雪の朝　昌圭

ウ
須ヤ古木の花の岩窟ゆく男
をのくなるべき発をのべく
文王乃ち卒ふかたりて　雅象
雨の栗宮　角ふみ　重五
机宝ふみ一度八尚たまふ葉　荷分
傾城乳をうくる春　晨明　李凡
雪さらふ　篠ふ人の影移り　雨桐
つゆやくとのべく神楽　くく　里　重五
手舞ふ乃ち乃ち更乃ち乃ちて　昌圭
花うす雪の歌ふ　李凡
枕よき二ほをあくらふ鞠かな　重五

入くる　　荷兮
うつうつと春をくらせる家ゐ連行そ　　李风
久不惱月　棒きて　　雨桐
黒髪をあつまる小切燈　　荷兮
ひともうつもきさみ位乃汁垂　　昌圭
雲ちぎれ木こ宮門うつあきそ　　雨桐
まうつの跡もを　見そこね河あそ　　重五
朝朗豆腐をもまる小もこける　　昌圭
会俳きふけあり　秋初そまり　　李风
穂蓼生ふ前を修吾庵傾そて　　重五
つる名を橋乃　名そうつ月　　荷兮
今此内手分小ふる　晒乃番ひ　　李风

勿然　おろく　　雨桐
ほこまもま　頭ま行なふ人家ゐまん　　荷兮
初雁ひうを二人くうま　　昌圭
世そこのらぬ扇涼ふ事うう　　雨桐
紀念ふもらぬ扇ふ皆畑　　重五
ひくまを行ふふもうく　　昌圭
寸も　記もうふ　りく　　李风

三くう云日野あ亭にて　　且薬
春ふ日坂や初うつ山の八市まろ　　野水
ありふ　うまむうこくの煙　　荷兮
真先藤第供ちうふ稼ぎて　　

越人
羽笠
雅水
旦藁
越人
荷分
羽笠
雅水
越人

また魂まつるまたうらの月　且薬
陽炎のうえのうえなる夫婦かな　越人
まん丸　神々しくも　荷兮
田を打ちてかえる里人　羽笠
ちるのねを一つぼつぼつ拾ひ水　飛水
淀や三井乃寺の鐘うすく　且薬
きえぬのを雲のはたてのみをつけよう　越人
君乃つくやう歩みよう　荷兮
　三月十六日　且薬の田舎へとまりて
鉦乃こえきてゆかしき春の夜　野水

窓ふかうナムの西のり　且薬
蔵高う岩木の鼻をかすめそ　越人
きりぎりす人を見そうなるのよ　荷兮
きえぬのる渡しの舟の月ぞ朧　冬文
ナムの物を拾ふる今ぞ増　孔学
残きくや旅商人の信のなうて　且薬
岩の間う荒れたる里　野水
雨の月も籠焼やうん煙うち　荷兮
ひうろきうのも一ぼん　越人
翠ようる竹うたんを植ゑそ　野ハ
解てやおうん枝ひろそやうね　冬文

日十九日　荷分宅ニて

笑ひ興じ合ひて帰る　順

行乃　和歌手うくる

初午の幸つよくうけ

別の月ハなくとも

跡を花四乃宮諭吉

まゐりくるみちの

永き日ハ今朝を時鳥

笑のこ草生ひ

紀路ゟ新ハあらた

連ゟのもとゟ

流壷ゟ供物

越人

且薬

冬文

荷分

且薬

野水

荷分

越人

野水

冬文

越人

宮ゟ参ゟうの　発句よさけれ

むさゝかゟゟ春ゟ世の中ゟ

延　二枚ま　ひろ

ゟゟの高あまり

墓ゟち谷ゟ送ゟま

風のなき春の日

ゟ羽乃　隆の

のゟまのさゝ

ほゟ〳〵　一歩

ゟ春ゟ

隆を　ゟ

ゟい花所

且薬

冬文

越人

且薬

野水

荷分

越人

冬文

追加

一三月十九日 舟泉水亭

越人

舟泉

聴雪

荷分

芭蕉

句空

荷分

桑鹿

荷分

執筆

春

元之

秋之坊

南甫

其糟

梅露

小松谷卜

四睡

利市

重五

昌千

雨村

舟泉

鞍のまるうめのこ　羽笠
舟〳〵出ん小雪の朝　且糸
暖の人魚や牡丹雪　杜国
優てうまし元日の　屋々
昼ふところ〳〵すまん　呑兎
けのこそも小雪哉　聴雪
初日二ツ御乃　荷兮
先明そ卯の宮ひく　全
芹摘そまけて酒のさ気うれ　且藁

のこる人の跡へ行こそ　越人
見えまで白雲いやしくもうき　芭蕉
古池や蛙飛こむ水の音

今ぞ此乃　蝶うり胡蝶共哉　重五
山や花　遷行くの酒もやし　亀村
花みうつりて夢ふかう亦ふる　越人

春野吟
旦ふる手鞠を曲る庵　杜国
蘭寺くまでの　李風
復来てきくらの　荷兮

餞別
蝶乃いねうかめそうれる　越人
山畑や菜種をうくる日の　重五
故郷や菜種をうる日の　全

夏

やくまきその尾ハ舌一
浦島さのけく時能てわらふ秋ハ
うらこそる板屋の浴ア一甲家
うまつまきハ一株の一ッ木
ハ行ふうらふくまで寒ふ事
今朝くまで寒ふ自ふ秋ふ
武蔵坊をとめゆく空の雲川
きぐうけやおくゆく空の雲川
遊女の袂ハ生見ゆるかふ吹て
うくくおくまうけり夏の月
老聃曰知足之足常足
父ふふ雑歌あの川さ共雲ハ

九白
李風
越人
杜園
亀翁
舟泉
南路
聴雪
越人

拂雨
塵交
荷分
仝
月主
童五
越人
且菜

秋
ア
食家

越人
雨柯
芭蕉
越人
野水

荷兮
荷兮
舟泉

杜國
大垣住
如行
昌碧
芭蕉
越人

杜国
荷兮

冬乃日

芭蕉

野水

荷兮

重五

杜国

正平

野水

芭蕉

重五

荷兮

芭蕉

杜國

荷兮

野水

村岡

堂五

野水

芭蕉

重五

荷兮
芭蕉
杜国
荷兮
野水
杜国
重五
野水
芭蕉
重五
荷兮
芭蕉

杜国
荷兮
野水
杜国
重五

埜水
杜国
芭蕉
荷兮

麻呂の月神の絵を賛せんと
桃花を　こきまぜ　負　徳の富
百とゆる　浅香の　山陰あり　人く
奥のまちくまで　いるまでなく
床あけて　待つ　人のこころなる　男
縁さるとけり　婚　のまりー
いもせと　痛　ゆきて　人
明月　うきみ　送ろう　きん
小三吉　盃　ひろう　乳
月入　遅う　ま一　牡丹　ねを　人
縄なわこ　乃　めるる　人　母　れ　髪　て　重五
まりくる　打こ　花　町　荷分

初日の出　杜国
ふるいくらの　まちをうれしき　杉風
松ちくの　ゆきやかなる　芭蕉
うぐいす　起こ　家　窗　ろ　て
徳ふるく　梢　枝　帯　て　重五
三位　うん　不　人　芭蕉
乃　そ　ろ　多　て　すれる　茶　を　亭　荷分
松さるく　の　さそ　七十　杜国
春　知　月　堂　人　金　ちる　重五
ひとり　の　今　氏　下　伞　さ　荷分
堂一　飛一　聲　の　程　久　れ　杜国
まち　こ　ぐ　ほ　ろ　蔭　を　す　き　野水

月ゝそゝる庵の髪の赤椿　荷兮
雲をおこさぬ時雨ふる空　野水
行脚乍ら虚に寒のきく酔ざめ　重五
籬竹実つゝみ来りつゝ　芭蕉
被ふり　裡をひらきおろすも　杜国
ひとり八畳の内の　重五
三ケ井寺の鐘尾をのこせる　荷兮
ちゝろ〳〵いさゝ越の稲活苅　杜国

ほそをひく蛸の骨うつ僧ら十歩　重五
つゝみつゝれそ月ゝ落を雲水　荷兮
おもゝゆく　多のいるさゝ　野水

當麻の寺の名を初秋人の家ゝ屋　芭蕉
北の門をおし〳〵あけ乃ちる　荷兮
茶の湯おこす野辺の蒲（タンポ）と英（うき）　正平
屏風ふるうは物よむ娘うつくしき　重五
焼筵ふるうはよかきみつくろふ　杜国
俳諧興行すゝめ乍ら　芭蕉
誓文さへ賣〳〵（うり）　野水
名月夜双六うちの旅うそ　杜国
おもひ出賞みちのおくさと発を作る　荷兮
去のふまのうぶさと発を作る　野水
命婦乃　重五

まうきまそ法師乃ふるあくろれ行
仲哈ふる　奥　解きけり
縣ふるされ　兄法師と仰れそ
又形　萱　の　留六又
うゑ〳〵けふ仲ふる雲ちると　荷分
真冨乃ふるの　称ふさうし　芭蕉
おうさ元や矢羽の指乃ふ糸　野水
庭垂のまりをよみてとろね　杜国
捨〳〵ふ法師　力　雪ふる年　荷分
晦日をさゝ〳〵　雪乃ふ冨の国の笠ゆり支　野水
禅ふ与ふ仲ふ　信仰をとく　重五
　　荷分

あふ人と　ゆうを指ふ二谷あさん　重五
枝ふのひと人ふ名をあふ禅　杜国
三日月の東ふ陸ふく指の変　芭蕉
猟流　うまふふれ　野水
高ふる事ふゆふ琴ふう人ふ者　杜国
去ふとき会仁業をふふる　荷分
うけうまき行発けふ乾笠て　野水
おりひうねふも指ふ花の常ふ引　重五
ふうま花ふあのうけふ入　荷分
その月を当日をふふ　ふ重ふ

ゆふ波仲ふ指ふ火焼出八十ふけふれと

炭 賣のをのうつまをそつゑふも
ひとの稚子ゐを 徒 霽（トキ） 寒（サム）く
花薫る 骨の雲れ 峡うつ
鶏頭る まをの月うまう 処
風吹ゐ秋の白絹を 洗ま日
芙蓉る うまを 帝ま 根まる
賀茂祭や 胡麻手代おう 像を
ゐつくらの 賀ゐつ ろーのつろ
れものこと 布橋ゐにうふまそ
うまへ さまら 越れ 三平（マル東）
捨うまそくねうまの 野れる
火 をうれ 火 雉な なきん 人を見ん

重五
荷分
杜国
野水
芭蕉
羽笠
荷分
重五
野水
杜国
羽笠
芭蕉

門守りの 翁不 成の 浮て 来る
血カ うくる 月の 傾きり
雪 ゆりて 木 ゐの 降 ゐまく
ふゆまう 初夏 ゐ なうくし
さるふ 注 桜の 像 ともてふろ
僧 ののの 欽 多 天む
白 燕 河ふぬ 羽をあふ
宣 青 うまく 剣を 降れ
八十年 三川 分 畳 毎もて
かろうまもる 七夕の 時ま
西南ふ 棟乃 さるのつむとき
蘭の ゐのうなト 来ろう ま

重五
荷分
杜国
野水
芭蕉
羽笠
荷分
重五
野水
杜国
羽笠
芭蕉

賤の家うし陸こうる女見てうる　重五
物箱ゐ栗せ洗ゐ月ゐうれ　荷分
さゐうまて於ゐうる正月ゐ　杜国
つくゐ多ゐる矢数の宮　野水
寅の日れ日を祈誓の氣起て　芭蕉
垂こうもうきいぐきこて神こそもおよぬ人の像　羽笠
汲こおろのきこて芹の根　荷分
鍋きるひうちのまうきこうこまう　重五
狩衣の　ゐふ鎧ゐ　まる凡　野水
北のうこなうくく公家山のうて　芭蕉
宴ふこまぬ無ろを　羽笠
まくる　むうゐ　杜国

田家眺望

雲月ゐ鶺（カリ）のえイ（ツン）こ　荷分
ろせ名月の　ゐのまうまうう
根松山家の体を　重五
ひまきうこうこの　杜国
音もゐこ具合月のうすこと　羽笠
敬こる臺（ハス）葉　野水
村乃ころ蓮のいく　芭蕉
衛　すまて富士　見ゆる寺　荷分
窟こうて　村乃見の景こる　杜国
茶ゐ糸経をそゐる　凡ゐ香　重五

雑述　烏帽子の　女　三十

座　一　吉野　松　野水
なつふくさ　山橋　羽笠
麻うとい　よ　荷兮
江を近く　狩宿と　芭蕉
糸月や　分ハおわろ　重五
旅ともも　笹ふた　荷兮
籠裏ゆる　寺私　羽笠
骨を乞　ゆふ涼　野水
九合　養せめ　芭蕉
泥のそ　尾を　荷兮
沖　笑　社国
重五

よふて　る　寺九　小角宮の　比
笠あ　ふ　山戸　赤つく　白
苅　あまの小竹　交　あく　よ
おろ　ちの　ふ涼　雪の　実
ちり　ふ　風　やう　ま
露　く　ま　ね　風
釣　よ　屋根　る　庭
豆腐　つ　そ　舟　の
元政の　寺九　狂　ら
伏見　木陰の　松　ふ
ふ　ま男　猫　ひ　を
寺九　ま　の　雪　を

野水
羽笠
荷兮
芭蕉
重五
杜国
羽笠
野水
芭蕉
荷兮
杜国
重五

野水　羽笠

羽笠　荷兮　重五　杜国　芭蕉　野水

雪のあけぐれの空のまだくらきに
ちかく寺鐘を聞人ごとに
薄墨をいくすじもあらそひて
乾坤の外までしろきいろの所うせ
山ぎはもほのぼのとなりぬる人

元禄三六月

越智

越人

花見

木のもとや汁も鱠も櫻かな　翁

西日のこころもとなきうき天気なり　珠碩

旅人の風うき柳まゆきて　曲水

さきそめてまだ太刀の鞘　翁

月侍ぐく仮寝の関の裏　碩

鞍置る　松うつくしき　水

名にきまで　三笠の森の　翁

入あひ　漸　碪の　雨　碩

申もせん　せんかた　山伏　水

翁

いふうのを修一方へ落しけり
そきゝ助よう　ゆく　硯
のおもふ　ふ頭の　秋のき　翁
月ふ頭の　秋のき　翁
秋風乃　船まそそそ　水
原ゆくうや　白よ　芙蓉　翁
多部倭　花乃盛乃一月田　硯
巡秋紅ゆふ　うけふ人　水
ものうも　憐乃　翁
文也やうの　なき　硯
羅ム一句を　水
鮮明みふた　注のひけう　翁

多乗乃紀の関守う　頑ケ　硯
酒てまけふ　水
双云の関紙　翁
仮の持仏　硯
中くふ　水
歌名人里乃　翁
好まれてのふ　水
月秋くふ　翁
花さまあまま　硯
峰里方　なる　翁
一妻乃御　水
医者のくまふ　硯

○

いろ〳〵の名もおもうやまぢの草　珠碩
こゝまで憶乃山ぢ八きもねる　翁路通
梅園のもゝ園よつゝをきゐて　仝
笠の紐をもとゞせぬ　休越　そう　仝
笠に森の実をうまるゝ冬の雪　碩
狸よなゝこゐて月みるの夕　仝
秋のを宮ものをせるけり　通
おもゝくまでて月ふるまらん　休　仝

梅ゝ香ぬ羽織を着ぬ引着て　碩
小六ゝ〳〵市ゝうへゝさ　仝
鏡　初尾ちのさゝ〳〵川の船　通
会佛中てゐるむ　そら　うき　仝
こゝら人〳〵笑ふ声の里乃大ふおとさ通　仝
旅姿雑き人の捲つ神す　碩
行年〳〵なのよ月ハおろ荻　仝
古のきゝ極のをゝ同ふう　仝
牛を朝ゐる　南乃　まゝ　小　荷ヲ
此村の廣きふ医者のなるけり　越人
我ろそんおけくのまつとのゝ

華野徑
里東
泥士
乙州
怒誰
泥士
里東
野徑
乙州
玲碩
怒誰

里東
玲碩
乙州
野徑
怒誰
泥士
玲碩
里東
野徑
乙州
泥士
怒誰

霜降の懐紙（ふところがみ）
四十八老乃
髪之毛の抜
酔を細目午
杉村の花八
田の庄湯
里東
珍碩
乙州
野径
怒誰
泥士

○

雜

亀乃甲ふ
峰年番よ
百姓乃木綿
小哥をゆ
乙州
珍碩
里東
探志

狩ふ
憐婦落
杜若の御
風呂の
雪乃や
初花り
公のそ
門前の
ふ
珍入の
まこよ
昌房
正秀
及肩
野径
二嘯
乙州
珍碩
里東
探志
昌房
正秀
及肩

茶の盛る名利の町屋の人々来
客を兵衛の　仙童乃ちく　あるま
うも国堂る同　ことんの　を家れ
詩仙堂　　乃　　わる
深くうき土俗　　のわをみ
摺ものまさまて　　けかの
眠うふ茶摺乃　　付
傳うを　　永まうは
いきうる鉢一勢　　梭箱
る及う雑　　朔乃杜
さくと切統の　　風
を加の序　　かなる月

野徑
二嘯
乙州
珠碩
里東
探志
昌房
正秀
及肩
野徑
二嘯
乙州

○

田野
暫乃や　黄代　時乃角士師　正秀
明まん　ふすむ　錦嵐竹顔　珍碩

珍碩
里東
探志
昌房
正秀
及肩
野徑
二嘯

全
秀
全
碩
秀
碩
秀
碩
秀
碩
秀
碩
秀
碩
秀
碩
秀
碩
秀
碩
秀

[illegible]
社入初　紅葉後の限本　碩秀
紫日路も皆[illegible]　碩秀
寸布よひ[illegible]　碩秀
沢山一瓦めく[illegible]られて　碩秀
[illegible]ありけるも[illegible]　秀碩
[illegible]観乃小人町[illegible]　碩秀
[illegible]の机来の[illegible]　秀碩
[illegible]鼓花午雪嶋[illegible]　碩秀
北野の[illegible]　秀

柿喰三吟

[illegible]　乙州

[illegible]　北枝
[illegible]　牧童
[illegible]　州
[illegible]　枝
[illegible]　童
[illegible]　州
[illegible]　枝
[illegible]　童
[illegible]　州
[illegible]　枝
[illegible]　童
[illegible]　州

枝童州枝童州枝童州枝童州枝童州

晉其角序

冬

初〳〵しく猪も小鹿も小春哉　芭蕉

河豚ほりや並ぶ家並の秋の海　其角

河豚ほりや並ぶ家並の秋の海　千那

幾人ぞおくれ先だつ雁の声　文帥僧

鉦打の猶ふりつゞく夜回の拍　正秀勝坊

庵ごとやひとりふたりの時雨ぬる　史邦

永き日やねぶりてそゝる一河豚　尚白

伊勢の海老ふらせ満ての一河豚　曽良

なつかしや志ぶかう出る初茸の笠　凡兆

時雨るゝや富士の見つゝ行くこゝろ

一ふうて行田乃一里や　大津　乙州
くものまさ〻れ〻ハ早の光や　羽江
新田ふり稗殻焼〻〻〻〻〻　昌房
いそうや汗氏河内の真帆行帆　太来
さつまふり行や北斗の星を前　百歳
一いろも動くものもおぼろ　野水

淀舟

さの霞のかなたこそ京の甲　其角
淀君もあらん遊切　仝
禅寺の塔もあやな神さび月　凡兆
雨雲もの屋も屋根も狂乱よ十月　嵐蘭
さつ〻〻しや乱脾痛心人乃旅　芭蕉

砂よけや近江のうえの名木哉　凡兆

なつ〻ゆて

梓〻床のうさかのうち　桔梗
跡枕をなつかしみ　玉芳
ちやの花やかうもあつて通る十歳ル　裾道
くのむの女のさし出すも新しき　越人
古寺の竹きりみがく青〻あらまし　猿雖
旅〻ろのあこそふく　凡兆
夫の雪さ牡丹のさかのまつ　徐
草深

時鳥もうそぶいのこゑ　其角
　　尚白

神迹ろ(ゐ)ちゝ一ろ(ゐ)涼　玲　琳碩

霜月朔日

猶まろう(ゐ)物も　素柏　良品
ろ(ゐ)雪月の　ろ(ゐ)まも　尾張　翠雨　不猫　江戸　玉仙
今ハ世をそのふけ　尾張　旦菜
尾張のまろ(ゐ)ろ(ゐ)き　海嵐
一枝〳〵さゆまき　波や　物干竿　肇　探九　去来
こちまろ(ゐ)ろ(ゐ)ろ(ゐ)

あつ氣を忘て涼の小船哉　丈艸
鳥羽くさき人を乗入る酒の酒　路通
起まて樣成うき夏の夢　且菓
横笛や首引入くる冬の月　杉風
去の戸や須磨のきこれてみの月　其角
うらうらやうやう行霞　暮年
見やるきさえ旅人さひし　智月
八角行衛のふきき金をおつとらる泥のうき男　竹戸
首出して其雪見をやとの会
題竹戸之会
ふるあへ我うきみのいつそ紙衾　曽良
魚のうけ物のやうせうきおれ　探丸

あつ氣を忘て涼の小船哉
清白砂不候哉
膝つきふうとそろり暮る霰うち　史邦
梭桐のふかく霰のおもわゝしき　壺碧
鶯の初音もおつとまつ
ほう人を殺霰哉　其角
こゝろ荒れ隠るまや初霰　丸北
さら雪や内小春さうな人の声　其角
初雪に寒き人やのそく　胡蝶
雪やけのうす紙次て寒るまろけ　史邦
つもるともみる九紀の雪の上乃　羽紅
小宗や雪の山より上乃　探丸
雨　丸北

なるくと川一ぬ柳や　ちるさくら　仝

信濃路をうるやうちもる

草葺の尚うるおひて

書名花ハ紙屋のけぶり　葎の雪　其角

ちる日ハ竹のそよ吹　ものの　旋　羽笠

涼しそも健の　平七

ひつうけて灯ともしまさ　去来

青垣遠嶂

乳のくさみ世なるうら吟ぎん　尚白

うら離も市の垣の内　芭蕉

鉢うち忙ハ似ぬものう　乙州

一貝ハ我み年ぬる世　さちうち　丈艸

住吉奉納

萩折樂や鳥羽の　其角

第一番よ作ふ又のそむくも迄　順　琢

家くそうちりやうきさく　祐甫

乙州う新宅ゑて

人ハ家をうつして我ハ年忘　芭蕉

駒迄仰我門ゆる世隣ゑ礼　其角

紫のあやうる祖父を忍ハかも桃　長和

うを娶ゑ一まハねうの宿　去来

大うやうまのむうまうる人まろ　仝

羽紅

やうくまでて又やまもりの事乃事
いねくと人のいとまもなき年の暮
年の暮 猶まつ事の数くさ

其角

夏

有明の面おこしや かくくきぬ
ゑまうきく 挙句 河鳥
関をはやくの一つ引むけよほくきす
やくくきぬけのようにて注なし
時雨 なもなき 路の 門ン 樣
ひとまたそはさのこをる 時 雨
蜀魂なくやせ 其のうれ角 豫

其角
木節
芭蕉
尚白
九兆
智月
史邦

入相ひくきの中やかくくきぬ 羽紅
なまきを 傳ようくのとう 丈艸
代 官屋や かくくきす 去来
きぬ〳〵我 物てなけほとくきす 奥西
春雨一日の暇そもりや 其のうれ角と

よりけまた

春雨や 寒ふ身ぬれかくきぬ 曽良
うきこ家をさのこくふせよくんとる 芭蕉
旅籠屋庭せまくく屋草枕見ん 曲水
為 祖業いろくうつくしき 曲水
四ノ八日清盛墓 其角
花あらしうつくしき卵 其角

冬ごもりまた折をえて摘む菜かな　　全峯

別　僧

ちる花のあとや先だつ法の水　　越人

春雨のこゝろもとなき人待ぬ　　玲碩

公角より仕下されそめて

似合しきけしの一本や須弥の雪　　杜国

青くさき匂ひもかすや麻の種　　嵐蘭

井のすゑ遠く清し杜若　　半残

起出てまづ拭ふ机のうれしさ　　仙化

題寺梁に満城落葉舎二首

夏柳ちる柿も有り寺の前　　九兆

破垣やつきこと寒のあの通り路　　曽良

南far旅店

冬のそら雲なき晴れ初め　　千那

洗濯やきのふの袖のあらまし柿の色　　薄芝

豊國祭

行末の力を誇る角力哉

名ばかりの宮や留守居も悪太郎　　去来

なげのこの枝さし向ふ絵のすゝき　　芭蕉

指す吹くさきうらの松

明石夜泊

潮垂や雲なき代や鏡山

雲の代や鏡山なる雪の月　　芭蕉

潮一つ　　越人

其角
芭蕉
江戸 岩翁
尚白
伊勢 蟬吟
芭蕉
其角
芭蕉
尚白
岩翁
蟬吟
芭蕉
九兆
木節
史邦
芭蕉

つくづくもさてかしこまる雨　去來

製剤や一庵ふさぐ春の雨　几兆

同の音こそ笑ひ傾く　芭蕉

縫物やいそがせそよふく雨　羽紅

七十余り老婆なりけり

古家まれなる年のことども

その老婆ひとりうし一時もきゝ不見わかて

人かなきりけふ六月の光

古家まれなる年のことども

ゆきゝうけふ六

六尺も力落やみ月の光　其角

面影も麦ふく風の涼哉　去來

まつ〳〵ま〻や此ふし婦これ　正秀

ぼうこ〻今ふものさけや麦の畠　猿雖　游力

孫を見して

まつ〳〵ま〻の家にてやうん雨愉　智月

変智恵にて雛まもる　吾　花紅

まつ〳〵ま〻の家にて

風流のさまの出羽の国極寒　芭蕉

出羽の雪上をもつ彩うて

羽根を画彩うて紅粉の花　仝

法隆寺開帳

法隆寺のそのまゝ伊の大きを保ち

河傍のそのまゝ伊の大きを保ち

河の面に至つくしかな　千邦

當の秋　伊万平

膳所曲水の樓ふて

當〻や　ゆくとしくれてのちの月

勢田當見二百里

やそのもやまこも淀の當〻

ふるさと見やゝ　船頭好てゆうれ

三絃の妙人詩仕るとき

當〻やまくもせろーき　八鬼尾谷

ひのうちふ拂ふ合なるあふ

草ふや一面合ふ中くたの良

病後

命つゝやうつらうつら百今の花

すゝ風や我ようやふ生ふ小つゝ升花

去来

凡兆

芭蕉

尾張　田上尼

尚白

半残

大坂　何処

乙刃

焼故諸を忙うて

ふのやなうん　ゝゝの春も故の春

餞別

ふゝまやゝ故ふ命ふ

うゝふふる人ふつまて

未官まる住者ふゝ

芽ゝ花を春ふ春ふ

陸明や春乃ふ

不當や此ふの

當ふりや　海ふ

彩てふ　ふ

家ゝや古国麻刈る

嵐蘭

播州　里東

其角

丈艸

嵐雪

播州　探志

芭蕉

伊勢　槻市

涼うけて蚤蚊の[illegible]
[illegible]の妻れ燭ず舟う合歓の花　九兆
白雨や 痔すゑ[illegible]ろを日の夕　千那
　　　　史邦

　　平安堂之蓮庭辺

白雨や 蓮一枝の枝のうね　嵐蘭
日焼田や 時〳〵つく〳〵なく蝉　乙州
日の暑さ 盥の底の曦うれ　九兆
ろそうも皐つき合を数多し　公
日の昏や ちうまそ暑き牛の舌　正秀
ゆく〳〵つ〳〵鮮ふよれそ鞘ふ蓮　木節
ちねんその教ろうふ風そのつうつ　野童
夕ろうふよろうまそつ〳〵暑さ　羽紅

　　寿日草ハ陽入ろうんひうまし　江戸　巴山
千ひろ苅まうけり松きそみのうま
よう生ろうのうそ中華ひうける

今さ人の 小粒も今や出用干　芭蕉
ろうまうも勢ろうねタすみ　嵐蘭
ちうまうふ寝れハ涼きタ宗次
きうまうも勢ふ門よ松のひ辺　九兆
辰ふ墨降く児のきみれ　千那
月鉾や 児乃袴着新ら 為 雅　曽良
夕ろまも 屹 蚤ハ比ろる今うの暇　去来
　　ちめそ降ふ
雷も降ず 今ハ比蚤も物多　大坂　之道

蛙飛や　蓮池ちらく木の花

　　加賀の金屋寺に宿る

ろくろくねけ　初夜の鐘や　藁のの　山

絶景　秋風まくや　藁のの　山

芦原や　蜻蛉の羽を　行の風

あさ雪や　蟻　金屋寺　行の風

きり雨や　筑紫の　卯花の　起あり

大比叡や　ととと　野菜のあを　道

　　不知讀人

杉風　曽良

路通　江戸山川

珍碩　凡兆　去来

野童

一二の雲ちりて　初くれはや　初汁　苗

文月や　六日も　常の　朝曇

合歓の　味の　薄き　夕月

七夕や　ひのまうけ　うりけり　初鰹　凡兆

あの影ハ　秀頼ぬ　ふるさとの　桜　芭蕉

葉や　ねむの　昼寝の　かうし　風

笑ふも　泣るも　似たる　夫婦　猿雖　及肩

多賀うけて　おとろく　物うき　杉風　嵐蘭

さてもなく　蔵の　青や　蜘蛛　千那

そよろくや　萩の　内より　初ゆふ　史邦

　　且薬

秋風や　子尹
迷ひ子の親のところやすき夜　羽紅
小顔おもひ〳〵に
ゆく雪の中に　允兆
すねもの〳〵一朋の先の長きか
ぼく〳〵ようけふもこころのめぐまれて
打ち未別て
君ゆくも春もまつ人一花曇　去来
草刈よそれも思ひの外の雨　平田李由
之綠二字ふさわしからぬ事ども
よう二三枝添木うるさき脚一ツ
かの風さそうそれもまた

先達ての
ぬくめうさこそ雨も降
相わす朱ぬうつくしき
百ぐさるるやうや入日さし
初雁ぬ沖鴨とるかまくら
堅田哉

曽良
芭蕉
允
汶梧

病雁の夜寒に落て
海士の屋ゝ小海老ゐるいろり
かぜの中雪こそ降ぬ
宝物ぐそ成ぬ
同く鮒のきれ
まのかのうま

芭蕉
全

むきんやる甲斐乃下乃きりぐ〳〵し

芭蕉

葉月哉　二百余乃中丸　雲の松

尚白

さるおりや　笑ひたる歟八月歟

風麥

のせぬまうけの月

文人

葉月や　名橋ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

去來
昌房
羽紅
尚白
凡兆
去來
越人
正秀
嵐雪
凡兆
曽良

千里
珍碩
凡兆
半残
尚白
其角
珍碩
士芳
凡兆

去來
塵生

肌寒し竹切山のうぐひすも　凡兆

神田祭

されいこうそひろめの梅よのはるの

祢田祭の鼓うつまで

梅咲くや人のつまなるうぐひすや　嵐雪

花さくき大名ぐらし哉　丈艸

行春乃四人日弱るきさらぎ哉　凡兆

きさらぎや凡そ一月風もろし　全

世の中へ鶯の尾のひろごりて　荷兮

植奥の畠ゆかしや妹の君　露沾

春

梅咲くや人の妻乃鶯も　ひな

上梅の出来ぬ年ぞ利しき法花経の哭

梅うき香や山路懸入る大のまね　去来

松先うき香や分入る里人の年貢角　加賀句也

庭奥

梅うき香や砂利しき法花経の哭

さし籠や寄る月影のき梅の花　半残

梅うき香や酒のうるみのうつくしき　蝉吟

むめの香や汁一杯を路ばたに　其角

その袋の法花の梅うるさゝ人ハ

門さゝぬ日ぞ一梅乃花　芭蕉

痩蚊や骨ばりたまの影乃物　千那

灰捨て白梅うるむ垣根哉　凡兆

日當りの春咲きそめや屠蘇幾年存　猪不支出

晴香淀は動月黄昏

入相乃梅ありなりひさご哉　風麥

武江ホかものむくゝ旅真土の秋雪

霜くるゝ雲の細月や　閑の猫　乙州

幸未のゝ〳〵酒や梅の花もし恋まさりなり

けまし四条嵐会う見ぬ人や

旬のを宝ふ者ゝ　ホ旧決ある

るれ雪ふ〳〵ほれもわれ小まて

感動男ゝ雪ふ〳〵涙もかゝりそう

るれハその秋の夏の神〳〵まちそて

好きけ〳〵きうゝ古人いまさ風雅を

つまされこうやや

百八のうち雪ひ一もし雪の　毒

夏きうでヌ一もし雪の　閑のむ老

ひうう〳〵雨も能守〳〵初ま日

降雪や屠蘇酒ふ〳〵初ま日

きの雪や雪ふ〳〵雨の降菜

貴社月雨ホ七ふ〳〵の関ゆく

嵐蒙

其角

去来

史邦

嵐蒙

如行

嵐雪

路通

其角

猿蓑

梅が香や隣を菜に小

つゝとそ踏守うそ初ふそ

七種や　踏うそ

我ゝゆと翁乃 丈艸
うすゐやうの 其角
徹こん雲乃ふ
時ゝなれいゐ
常のまゝ昭君 頃種ゝ事 イカ 一桐
うゝゐまやまや一葉のあゝふ 芦 溪石
常や幸ゝ逃かゝう 礼ゝ 其角
常や小袖乃 兆
うゝゐ千や宮 イカ 魚口
翁のまやゝ 芦 十宅 探丸
時くき 翁ゝれ
頃越ゝゐゝくてまゐ翁ふ 日 遠水

ゝゝ川 柳ゝれ 尚白
貴郷乃まゝれや 雑の 行所 イカ 一啖
まゝけや 松のゝ 世のまゝ 全 木白
侍中の五月ゐ 楊水
田家ゐゝそ

まゝゐゝゐやゝゝ 芭蕉
うゝゐゝ 越人
うゝき まゐゝれて 猫のまゝ 去來
露店ゐゝそ隆宮の當中、

まゝ凡ゝゐぬまゝ 亀翁
翁乃 森のちゝゐ 尚白
出ゝゝや 松ゐゐゝ 亀翁

嵐雪
凡兆
其角
杉峯
元志
荷兮
百歳
士芳
氷園
凡兆
芭蕉
配力

嵐雪
路通
野水
凡兆
澤雉
嵐亭

猿雉
芭蕉
史邦
羽紅
史邦

蜂とまる茎葉の汁や雲の峯

稲妻やかなをる玄米の艇　イガ去来

たそがれくあるさくら餅の光の名　荻子

桃却くうくいのくや　女のみ　羽紅

うの花垣さらぬ　三川烏巣

里人の暇蒔しうる田際うれ　嵐雪

蜂の来て一物ゆかし秋の暮　半残

蚤虱ともかく嶽を行くまゝに　賀山桃妖

いつのかうくうくや　イカ園風

日乃くれやすゝ乃親雀　珍碩

行秋鮭らむさゝの干ものや　柳の光

関の茶や　菜をまるめてそく衛　土芳

　　芭蕉

越よう秘阿へ行とて洛のこうの

わやうきことをそ笑ふ雪のうら

さまよひて

鷺の脛の杜杖の枝ふ　凡兆

ふやうなく雪霊のこうの　石口

子や待ん隣うち　杉風

ひろうなく中共　芭蕉

芭蕉庵のふる茶訪

茎草山猫流し　曲水

木瓜落て花見　山店

山吹や宇治の焼炉の匂ふ時　芭蕉

向ふの岸にうつくしき桜の木の有けるを
つくづくとうちながめやりて
おもひつゞけんも物ふかうこそ
さくまをうえて　車来

并もうつも昔やちり桜　紅
蜑牛赤うめせよ津國坂上氏
うつゝにすの笠おもかげ　芭蕉
さろさゝんさくらを追ふ　利雪
東叡山のさくらかりうへられて
少坊うち　其角
一枝ハ折らぬもつゝしみ　桜　尚白
跡のおもひもさくらかな　几圃

真先に見つけたるハ梅の花
方角明のさくらかな　丈艸
常ならぬ香ある花の匂ひ　旦邦
猶見てをらん　神乃風　芭蕉
いろの変ぬ垣のつゝじ其のゝ南うら
なきまでふるの料ハ物ぐさけるとうら
さん屋ねれハ　千那
一里ハこゝれ花守の名残かな　公
七ツ父の墓未だ存ぜず二三年
別墅二十年の後ろの松ハ
墓の上の桜植ゑ置けるとかや

母の物ぐさうつくしみその葉をそろへ
　住けるあとの墓牡丹咲くづれたれバ
ほろ〳〵と山吹散るや女郎花　園風
初ふく人やこのかり〳〵と花見うれ　去来
ある僧の膝ひしげて　凡兆
　宿人のなきうそ
嵐ふく三日の内の花ざかり　半残
腰きれ弁当ひらく　芭　イガ　長眉
　すみれ生るゝ春の野の末
大堂やよりの〳〵の　曽良
　乞摂待や　行人その代と嵐雪　山嵐蘭

源氏の繪を見る
桐壺や　羽紅
　廣幸の心引ざし
燒ぬうさ　加州　北枝
すかちるや　凡兆
海紫のさゝの小溝　普船
　大和行御の供
草ぶく宿　芭蕉
山鳥や跡踏よする尾のしだり　探九
やまつゝじ海ふかうして夕日影　智月
名角にて却花　山川
　聲のかすきそろふ　イガ　式之

ゆきゝのくる夏後ー〳〵杜若
まきまいろよきものきりやのの袋
谷のもこまのの
里見え 初ク、
ものまくる志賀
笑 蓉の古れの
吸ものハ先出
三里伝まうの
古のまゝも廬園の男居
さゝ未つきくる月の 統荻
苔るゝ 荻本
ひとり歩ーとく 脱立

邦
北
來
蕉
邦
北
蕉
來
邦
北
蕉
來

去來

乙及
曽良

芭蕉

芭蕉
凡兆
史邦

蕉
來

いちごさく十二日の初もみぢ　兆
もるけふ安きかり小屋の窓　邦
ゆふぐれは雲もいそぐか雨の月　來
かくまでに時雨ふりけり旅の空　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦
僧をうらやむ車川　ちむ　兆
うき人に松殻頼むうづら哉　蕉
ゆきやうさきの力きり　ゝを　來
せり一けふ摘そへてはをきちらし　邦
おもひ切るもおろかや　臭よ　兆
青天ゝ白明月の初ふゆ日　蕉
此あたりの杜氏比なの　初霜　來

市中は物さわがしや夏の月　凡兆
あつしくと門〳〵のおそ　芭蕉
二番草ふるうちくらう穂ぬきて　去來
戻うちくらう一杯　兆
此あたり浪も入江も春の月　蕉

邦　兆　蕉　來　兆　邦

[illegible] 來
草村午 惟 [illegible] 兆
藤の芽 [illegible] 蕉
乃公のおろく [illegible] 来
能登の七尾の [illegible] 兆
魚の骨 [illegible] 蕉
待人入 [illegible] 来
立つて屏風を倒して [illegible] 兆
湯殿に竹 [illegible] 蕉
笛香の実 [illegible] 来
得やくさもく [illegible] 兆
さるかにの [illegible] 蕉

年の一度の [illegible] 兆
みそか天 [illegible] 来
昼寝ふく [illegible] 蕉
逃てそく早き [illegible] 来
てちう [illegible] 兆
戸 [illegible] 蕉
てんしやう [illegible] 来
おもく [illegible] 兆
髪をふく [illegible] 蕉
そのまゝおろ [illegible] 来
ゆうて世 [illegible] 兆
草餞 [illegible] 蕉

いのち賭しまで　釋迦のさとり
さるみつを品うらうらをしそ　来
浮世乃果ら　皆小町なり　兆
なれりをを粥まうあを溪くま　蕉
四角うわ　なれ廣き　杉菱　来
まのひとの風うまで遠ぐ千る花のうみ　兆
うそこうまうね　昼の極りさ　蕉
　　来

灰汁桶乃雫やこけらおとしも　凡兆
わるうもう　雪を捨る　我　芭蕉
新米こしきなり　月うみな　野水
なくへて腫一　十りさうき　去来

その汁絞くまものを掬くの目しそ
堂のまるみうもう雪　降　於
摩郡うこう　降る　まうみ話
ゆめうまうそ　雪ふりうれる
桂のにまをうまきそ　こえ味よき
ものおのひけめ　こえれて　体のまを
迎せうき　屋よう　の　秋
金粉と人なよまるく　の　蕉
あう風呂まきの雪くの月　兆
町内の　我を文り　明やしき　来
仏をとうみも　家　まうかう　凡

いねやうち多刃ハ 西合ふ寝そ

名 本多乃都 茎みまろそれつ

うくうやふ 注 仲ふ四十うう

生まる家のものむねをうつける

多ふ弁 かまそ成る 水風

旅の独まふ明 くく

さまふ女のかまそれて

仏おもひ草 寝のなく

文月秋 宮乃 簀ねのひ南る

人もまれ うみのう

うねうまふ自 いうせんん

又も大のの 数をそ

蕉北水来蕉北水来蕉北水来

北蕉来水蕉北来水蕉北来水

現ようく 田行まうそうくよき 社ふう

加義のやうろく 物ううの 屍

雨のやうの 常 迅速

是わふる まま 駄の為のふみまよ

志ようふく 兎の 蘭のをうくらん

泉さるる 股のつまのふ 候ふけり

まふく 三月 曙 の 我ら

餞乙刃東武行

梅 若葉 まろ 曙

うまつのふしまき 小田ふ 古 枝はれや

雪ま 雀 なく

芭蕉

乙州

珍碩

素男
朶
智月
朶
兆

去來
北
正秀
來
半殘
芳
土芳
殘
園風
錐

石山の奥、岩間のうしろ、国分山の麓、滋賀の郡に、
曲水の清流を帯、三上山を仰ぎ、田上山を見る。
国分寺の古跡は、誰人の造立ぞと、いにしへをたづぬれば、
天智天皇の都のあと、崇福寺の大門のみ、
石山寺の石間の風、
蘆の葉分の月影、
かろうして、
漸に、
松の下、
竹の中、
筧の水、
岩の苔、
土に埋む木の実、
自ら、
生ひ、
自ら、
落る、
すべて、
静かなる、
山居の、
気色、
また、
あるじの、
人柄、
いと、
ゆかしければ、
麓に、
一年、
住み、
二年、
住み、
三年、
住みぬ。
春は、
藤波を、
見、
夏は、
ほととぎすを、
聞き、
秋は、
月を、
賞で、
雪を、
待つ。
日々に、
山の、
気色、
時々に、
月の、
形容、
あきる、
事、
なし。
ここに、
猟師の、
来りて、
世を、
語り、
市の、
翁の、
来りて、
年を、
問ふ。
その、
人、
その、
事、
皆、
自ら、
閑を、
得たり。
ある、
時は、
麓に、
下りて、
世の、
人と、
交はり、
ある、
時は、
仏の、
道に、
入りて、
草の、
庵に、
居る。
ある、
時は、
美景に、
対して、
自ら、
書を、
読み、
ある、
時は、
無用に、
して、
終日、
閑を、
楽しむ。
ここに、
三曲三百歩あつて、
八畳敷ばかりの、
庵を、
結ぶ。
竹を、
柱として、
四方に、
掛け、
菰を、
敷いて、
夜の、
衾を、
設け、
昼の、
座を、
設く。
いく、
種ぞ、
物、
ここに、
草庵に、
住まつて、
はじめて、
四年の、
春を、
迎へ、
夏を、
迎へ、
秋を、
迎へ、
冬を、
迎へ

時ゝ北斉中一貝そある　藤くれ　曲水
ゝゝさゝそのゝ嶋ちゝとなつの山　野水
ゝくゝ同ゝゝ弱ゝゝく　去來
ゝゝ雨そゝや一くゝ　凡兆
形ちゝき当谷利梁おゝ礼猿のあ　千那
細径のやゝゝゝ夏ゝゝ　琳碩

おゝゝゝ紙ゝゝゝ送ゝ　野径
ゝゝゝて藤のゝゝゝゝ　里東
蚤ゝ死ゝ平ゝのゝ　乙刕　猿蓑
顔や洋乃ゝゝ　怒羅　猿蓑
ゝゝゝ等ゝゝゝ　探志
ゝ羽ゝ唐ゝゝゝ　元志　猿蓑
ゝゝゝゝゝゝ　泥土
ゝゝゝゝゝ風乃ゝ　史邦
月待や海を隔ゝゝ　正秀
ゝゝゝゝ雪のゝゝ　支柳　陰
ゝゝゝゝ本　如行

坊ふ以角そあう

推乃生そう人てす帰冬蝉の聲又
月ひ下やうもふかふ水清し　雀示　朴水
文ひそうあも　　市隠

腸所年あ　早仙田のくみみ久添　半残
まう乃藤をそ春ふ
一袋とれやもう相田のそう妻　之造
書　晉

一復ふるふきうや旅ねする　雀浮　魯町
久うあ　柊朱の奥の一ちまう　及肩

　　舞機腰掛
秋風や　田上山ひりくるう　尚白

路芸
おうふ雪のふるものうの行衆　北枝
本屋ねく　清水ふきけう要の花　木節
　包家に書
縫ふ　おうあ　雀示　雪の庵
福ふの花　仲乃　智月
石山や行うて宿ふ一枕の風　羽紅
梅の梢やきれてはやむまうは　昌房
里人今久の一時のつゆ小　何所
帰やいく　おのうのうあと　越人
　　おく人と乃いく　汐今て
蓮の実のそまは飛入庵ふ　等哉

明年落ち葉を
春雨やものぐさ
同夏
涼しさや竹巷を

約束の小る一ま廿壽ふ
十里ばかりの今所へ出らう
笠のごまま小路拾ひてかりの宝
ひつそりと門乃まつけ
いつくへか捨ふかなき男情を
やつと関宝ふ京の乃川まで
あの明よおくをおのそてあもて
同そのふそのふ物のまへ口
まちまちまちまの岩れる化き更
伊勢のか向ふ乃ふりと遠
も待ふ小拳のの仲ふそふくと
くふふふふと帝ふそれるまち雲

首
里
沾
蕉
里
莧
沾
蕉

禅寺丸一日あそふ砂乃上
概乃角打ちそふ泉　翌　宅
濱出乃丹年にほ様をそふふり
なれぬ服ふへふくふ内泥
月待ふ徳右筆元のうちそふ
鼠乃菊の名をくく
ませれて来ふ栗そ植もむくの髪
住侶ちふる　乃表ふき
別やうま　も月坂の　あふ月
まちふくに年のこあまふまる
引立てもふふ森ふるこをやうさ
井ふと　火入ふ　薫

里
莧
蕉
沾
莧
里
莧
蕉
沾

荒れたる我が庭に植ゑおきし
撫子の花咲きにけるかも

崔乃家やゝ栄ふて後る者疫
てうたの岸おのりろ文月
立家を雲そそのまゝ八杜春そ
ふのくまなる秋のおく甘酒
霜家なる女を倍み女人
蓮をあいそ外の法豆
胸しまう八けふの一歩の足をこゑ
清水をんてまゐありけり

馬莧
沽圃
里圃
莧
沽
里
莧
沽

よそに見るもおのの天乞まの底
あるふう あるう 乃ち客
行るもなくてあるくて 泊迎
風ふさぐる早稲の穂月
秀新 秋の住居人て
庵主のむすこ女て牙ゆけり
明るある伊勢の手筋の手筋り
簑八あるくのりろ一徳
住居事あるありて宇まき紀盛り
まら線まある竹の深 彊
営のあるハ雪を掃銭
あるぬ 合点て 居る

里
莧
沽
里
莧
沽
里
莧
沽

年〳〵ふる人うちの者とすゝめく
三時 敦賀のいで湯のうさもうき
汁の実よりおもふ茄子の心感ぎて
あるじもまをしまろがれとる
ひ〳〵ふ寺の指図をまち出て
屋のおもての竹林しづき
物うそまさる九つ八小雨ひ
里下〳〵て庭ふかき料理なり
机入て秋よりふる雨月
頼もあわれく 玉笹の露
ふく会ふ 実の母の跡問て
ふる竹を折 出羽乃 庄内

里 荒 沾 里 荒 里 沾 荒 沾

亜の初まて性なる時のものゝ物
関て気味よき 杉苗の 風
花のかけ当を立雑巾の音ゝ
あふ用の出乃 かゝ〳〵うけろよ

里 荒 沾 里

ゆさ〳〵と摩ゝ引まゆる鳥ゝ和
冬のまゝ花のこゝろ 雪あふら 飛
大根のそろねおそふくれて 沾圃
上やとそふ 秋 芭蕉
町切ふ月見の 馬 荒
花のうちくと通る一つ次 沾
里

智恩院の智鏡坊にて
まうでゝの後ハ 机うちやく
徂の顔ふみをとりて
国利て家ハよ
此おもを盗ものゝ
まこと七のまへあらね 同乃歌
草のまくらとくさの露ちり
仔狗ころの 綿ころの
うき旅ハ駆こつまと宣渡の
有明そらふ 明そらふ 共ふ
此本松のねたの中よりほうこと出そ
柳乃陰人 門をたてけり

荒 沾 里 荒 沾 里 荒 沾 里 荒 沾 里

百姓おなりて世ろもまつまよ
あまのを猪よおろも仔猫
清物の 澄紙つゝ
けふのまへまへ共ふ
砂を這ふ蘇の中の
別を人の 小ひ
火燵乃火けて
一石ふゝ 雅
初くゝ 実国の
御ふか 滅の
月りけふまつゝまよ
おのひのまゝ早稲て風根ふく

荒 沾 里 荒 沾 里 荒 沾 里

手柄の庇をやりて施のさま　芭蕉
雪の気をもちて住吉の　沾圃
花のなごりの遠浦の　支考
ものひけうなる山陰の　芭蕉
冬ようふきくなるころ池の鴨　沾圃
一雨ふりて　わらべなる風　惟然

猿蓑よりわれもまのの杉叢　沾圃
日ハ定ル月ハ常なる　芭蕉
水うるく池の中うろ乃ごとく　支考
篠竹まばら　はまをいろく　惟然

[illegible]ろあるくとやりて施のさま　芭蕉
通ふのあるかなきかの月　支考
雪ちるまゝに一晩にて春ふけぬる気の毒
笹ふる藤のく棒をもつてうかれ　芭蕉
聟うまでもつもせよ施の告　支考
神ありの時ハ一年にて春ふけぬる気の毒
朝日の日ハ一年にて春ふけぬる気の毒　芭蕉
一年朝廷うれしき人やう植ゑ捨れ　惟然
気もそんしる青苔の根相　芭蕉
山下門前の月　惟然
初あらし畠の人のみまうら　支考
多陰光る　小鯛　芭蕉

乃て通る紀三井八花の咲ころ
苔考
苔のもちひろうみ永きヨ
ふもち風吐又西よりあり北おあり
然
つるおか脇を大ぞりかるく
蕉
法性の内義八そ皮包安ろう
考
宣般のさまもむさこせうまぬ
然
大せめる日う二日めの暮よ清
蕉
をくきつけ
考
来ろ私のこ来掛八皆幻元
然
奥の世盃八 法迄年お 作
蕉
酒ろうも寿のやまき月ろそ
考
末頼近を 庭り 西面
然

宮まうぬ娘のお
庭汗のさまる
考
もの話をはろうこ
然
大工はりひの 角
蕉
栄橋も けふ八
考
かろ身て市の
蕉
此なろう法せ八
然
聊の 神のまさ
考

今雪賦

野盤子
文考

今雪八六月十六日杜牧ふ東方の
乱ひろかけて衣裳ふ湖あお秋をあくむされと

酔て梅うるものから八重ざくらの散みだれもの牛蒡
とたとふれもの哉

この宿や崩て明ゝ冷ゝ物　芭蕉
雪ふくたゝみ蓬の　椽先　曲翠
学ふ机のすゝまるを　卜高
古き革袋なを哉おし　惟然
月影の雪もちうる雲のそ　支考
ものをうるかる〻夏　芭蕉
飯柱なる面桶ふさぎ掠　翠
　　　　　　　　　　　雪

ものう頃伴　考
おもふらう秋ふまるく　蕉
樽俳のうゝく　翠
平暗れ菜を持ふ　考
秋風うるる　雪　紙
うりて独ゐ初る　月　雪
尾活て休きゝ　蕉
隣なのうゝくれて　翠
山月ゆく　穂も　雪
すゝ風うゝ菊ふ　ほゝ　紙
爰うゝ村ゝ　ぬゝ　考
食うゝ松ゐ誰ゝ　蕉

[illegible] 袈裟
[illegible] 宇
[illegible] 蕉
[illegible] 考
[illegible] 然
[illegible] 袈
[illegible] 宇
[illegible] 蕉
[illegible] 考
[illegible] 然
[illegible] 袈
[illegible] 宇

大きなる 陸の [illegible] 然
盛ある花ゆゑ 霧の [illegible] 考
優うけ [illegible] 宇

春色や花揚

温石や [illegible] 萩寺や初稲 露沾
霞時なれ又こゝ菅門うち揚 其角
頬つ似れかう白もおよ初さら 芭蕉
ちろろや 朱の役くるたのふ 洞木
角のまゝ人をかつらやたの麦 丈艸
花散て竹見る彩のやうな 洒堂

富士まうで　惟然
帆まきも酔の　支考
酒飲て琴の　沾徳
聴ふして隣を　猿雖
人のくれ　翁
くのる国や　湯和
古ちよう　乙州
見ぐ所　木節
咲花をおもふ　沾荷
家座や床あり　子珊
二乃段やさみ　卓袋
公事ぬりおすく　翁

田家
蕎菊乃名物ぐさん　李里
笑ふうらやま　桃首
山門ぐたのめ　一桐
なる是ぬの根やわらぐたの　如雪
見たる生をきせて　其角
きあるやうふ雪　少
ねうち雪に　一鷺
一見八花見のついで　卓袋
八まきをかうこ来る　沾圃
若菜
漸猫や　女
あらう〳〵　嵐雪

角の沸やし 油乃名葉ハ
夕汲の松よ 梅ならなる
一うふ乃牡丹ハ 梅ならなる

梅附柳

春もやゝ気色ととのふ月と梅　曲翠
弥生ちかき夜の雨かな　狐屋
守梅乃わそ八葉重ねや　尾陀

里坊ゝ雉きゝ投入るや　芭蕉
梅のわそ路のなう　馬角
病後の寝ま寒し梅花　昌房
わそ八重き寒ま寒し梅花　良品
寒ゆそ梅の香ま寒ゆ　万平
梅の香ま寒ゆ　魚日

梅やゝ梅ゝ
宝暦卯年 梅ゝ梅柳
天神の

月みつけとゝろ　千川
梅ゝの　大丹

時ゝゝゝ
ちゝゝを教へ　古柳
まゝ柳乃あゝ
輪をうけて　李由
雪附魚　九蓋
巴文

雪ゝゝゝ　其角
ゝゝゝ　史邦

芭蕉　季用
西堂　李朱
仝下　仝
長虹　仝
峯岚　峯壺
槻市　峯
河瓢　仝
狗筆　仝

圃水　土芳
子珊　圃水
山蜂　子珊
其角　山蜂

羽紅　正秀
猿蓑　此筋
闇指　仝

車来
荒雀
馬覓
拙候
乃龍
正秀
夕可
一桐
圃落

擬九
支考

猫戀 附蝴蝶

猫の恋や切見世の行灯
恋猫や見るうちさかる
猫の恋やむくつけき
猫の恋やむくつけき
猫の恋やむくつけき

千刈の田をうえ人ごとにうた舞ふ　野坡

桃　附椿

白桃やまろうく盛るうり　桃乃花　桃隣

金屏は古き盛るうり　桃乃花　公花

伏見うと茅屋の上乃飛りの花　雪芝

梅さりくらゆきの奴の狐躍　水鷗

花さそふ桃やこゆきの狐躍　其角

江東の春雨の狐父の陳列うるおのく

経文駄乃行燈の光明うるみて

小猿痺ふ出をやうせ玉つさき　角上

穂く柿そ、ま屋の兵候　柿うり　残香

元旦のけて男子のうや　柿うりの花　洞木

ちり積りうまりうるまの濱下駄

歎き附郷家の

山吹や頃に干うる茅葺　一重　閑指

田家の人手舞して

山いもちうみ乃鶏なき

堀おこしつくしの摘や　蛙のうる　野坡

菱喰や　穂ま支にうく桜の花　荊口

春　月

山の端をちうくうるまうる月　まつ秀　魯町

春雨　附ま云雪駄

物うるさき草の庵うるやまうの夜

松ま人　洞な入合けり　春ふ柄　荊口

乃於

まつ雨や　磨ぬる甘茶ざる　　游刀

かなふりつゝ武江の福庵を尋ける時

春雨や　花くうくうと　　支考

する雨や　光うつうつと　　桃

汝干　　凡

うかう帆の　沙汰もなしに　　虫衆

不川不富士の　形ふき汝干　　園指

綾春

ぬりかへやめりくれ　　許六

若竹やまろく越る　桐の苗　　凡瞰

雪ながら　雪の腰の　　玉芳

ちりそめや　嶺ちりそめや　　紀方

小栗を記念ながら　　万平

猿毎年　猿酒や　　苔蘇

未の牛　うれや　　正秀

雪乃奥や　茶の木の中　　均水

三尺の　雛さびる　　仙化

引ずりや　仲ふ文ぐ　　支浪

三月尽

納豆を　白酒ぐりの　　支考

菜屋　　少年

若竹や　ぐるりぐるりの　　武仙

百歳
尚白
圍落
山蜂
千川
芭蕉
其角
岚雪
去来
土芳
猿雖
蔦雫
耽童
耕雪
左柳
前川
斜嶺
山蜂
任行
竹戸
風牆

永やこゝろ何ごに結ぶ
梅栗や俳ホやまもと似つき
雪の日や客ひとりきて
掩柳や日ハさしあたる
砂よりや素ゆり初る
志ゐるさや猶ハ月の
猶有羽うく有ル
成のそのゝ葉柱ふむ傳有
陽春をこゝろやものゝこゝろかと
かけうかやう法有
糸きくく頃ハ志ゐるゝ糸をり糸ル
葉う傍の深き

且薬　牧笛
洛圃　李東
圃角　須之
北枝　和平
誉風　何處
渓川　大坂牧童
貞喜　奥州不的
春幾　和之
蕉下　女
楚常　尼知月
桃葉　其角
　　雨邑

日すゐや胡蝶猶浦ホ翁
来ゐゝくくゐやゝくゝ入七夕
郎紀貫ちゆくえ
まの如く夜神もゝゝ
七くさゐおりてさうや誰
ゐんや芥生小糸のまひた
ゐなりそて出のほう法神ル
くさの芽のうへよ千ゝ蓮ル
あつゝきんのうけん物のまう
う我あけてうくゐ物
時やこゝゐ桃葉の
ふつゝくまやまやゝ松の志

郭公

曉の雲をさそふや時鳥　其角

ほとゝぎす文に

ほとゝぎすまだ啼やらぬ燭の影　丈艸

ほとゝぎす啼や湖水のきり燭　若言

ほとゝぎす啼てわかれし山路哉　支考

ほとゝぎす聴ね寝向ふ新発意　如雪

ほとゝぎす乃名をせうとの小時雨　芦本

燕の巣のかたむく宮やほとゝぎす　破蕉

ほとゝぎす石山の禁をそ順礼の吟　言落

郭公うさいの雲や中やどり　沾圃

木附草花

秋そ妨けたる

遍昭の簑さへとうしまの雨　牧童

まつ虫や沖こぎ出る舟の梅　漁川

をるまてゝ虫のとまりしまの雨　雨邑

そるるまや朱のやうにも雫石動　宇白

沖こぎ出る舟の梅　一笑

鳴虫そみちくる小田の雁金　狐舟

うちつゞく峯の松風岩戸の雁　字路

笹のやのもくさや雫もあく雁　流志

秋そ妨けたる

遍昭の簑さへとうしまの雨　牧童

まつ虫や沖こぎ出る舟の梅　漁川

をるまてゝ虫のとまりしまの雨　雨邑

そるるまや朱のやうにも雫石動　宇白

沖こぎ出る舟の梅　一笑

鳴虫そみちくる小田の雁金　狐舟

うちつゞく峯の松風岩戸の雁　字路

笹のやのもくさや雫もあく雁　流志

かすや　日永ちるこゑ　閑栖
里〳〵や　麥うねうね　飛萩

園中二句

仕伸乃　吉歩の　椅の花
年切の　きゝ手も　柿の　千川
蛸百合や　上ようさる　蜂の　素拙

題山家二百合

あら雪や　うきれを　洛る　百合の花　支考
山もとの　ゆふべや　柿の　尾形
冷汁や　ひと　きゝ　佐圃
ものよく〳〵　深う　宇多都
夏菊や　おもの　先へさく　拙候

十三夜庵の句合　判盛

蚤うるや　日ハくれも　芭蕉　六
夕ぐれや　酔てうそ寒　岚蘭
小春日や　探さ　起　残香
藻乃花を　ちらみよき　入江ハ　什筥
蘭乃花　ちらくと　あの　濁ル　白雪
蓮の葉や　谷の　ふかき　良品
雲あつ〳〵　せの　里乃　蜩哉

風

朝露ホよう稗て　芭蕉
蛛ふりや　袖に　入て　玉暁
そうん

篠相する笹人ぬきんれぬ杜衆　凡弦

早苗

京人やう利の田植の俤や甲　卯七
早乙女や結んで植んいさの仮　閑指
ふる郎の極おくまでやうえんいさの里薫　魚日
田植うまそまる新の泥ひ〜　主幼
一田川くれやうてや水のまる　北枝
里ちまよう歌拾るまで南うれ　支考

蛍

数生火の相まそ　かさる弐　許六
二日月よ草乃雲ハ明よろう　無茶

納涼

涼しさや行橋うれ翁つる　半残
今宵ハたや度ふもむふ久涼　雅然

涼川の奈や月ふ奈ふ宿て
涼しさハ笹や月ふ奈ふ宿て
十まで松笹や月ふ奈ふ宿て
石ぶみや青川の上の仕て久まで　史邦
涼しさよ牛乃尾指ふ川の中　万平

漫興三句

簾うけて伸ふ涼しさ涼ふの形　洒堂
涼しさや柳ふう白ふまふ涼ふ　支考
牛の好を拾ちふ白ふう涼ふ　言水
ふ笹松ふ笹を茶ふ笹ふ笹て

涼風も雲来てふくや稲の秋　雄刀
いそぐとき　中をぬけくる涼かな　全
立ながらくらくと涼や　石乃上　去来
跡絶よまろき涼みや　正芳　正秀
蔵人も　解ぬ衣の見ゆる哉　我眉　士芳
庭草やむしのゐのこる月ざし　里圃　我眉

盆　夏

かくまでや暗うそだてし庭の隅　野萩
春を慶る里ごころの暑かな　万平
　敬而去のこさるやまれ人の音　万平
実ものもとくまでは候へ共暑かな　正秀

それ迄の内めいめいや稲つるび　乙刀
稲さうる同志あつまる壁の前　尾張　怒風
夜ひの垣もあまりぬ暑かな　素浪
草のそよや暑を月のれんじより　我峯
ゆうさりや扇さしたる人の数　素苔
後の月て暑さのやまぬ哉　卓袋
粘うある蛇も暑さに入れんもうちやの暑かな　里東
竹のさ　沾圃
菊まぬうく岩の山崩さ　可誠
芝行や烟のつゝく屋根の窓　曲翠
又月雨晴そ

デハ不玉
芭蕉
沾圃
拙候
菖蒲
暁烏
圃水

正秀
如故
乙州
暁烏

かりを
沾圃の夏や　御あらうそうを
雑夏
蚤虱そそのの動やむ　圃水
寒食　松凡
雨ふるや　荊口
夏痩も　和
寒食　真
川狩よ
ちる桜や　文鳥
つまのもの　蒿雀
久閑やうち　水鶏
物ごとに
魚のめる　馬莧

梅せまる　笠　日乃面　重喜
江戸や道　有　雨　乃ゆと　胆喜
蹄牛　ほのぐ　一　夜のそよ八　多酔

晋の洲明を

霧のまゆや　萱草　そを枝
霧ふ　至ふ霧ふ　惟然
粘ふふ　惟ふ　ふ
ふ奥信のふ　ふ
ふ　ふ　ふ
ふ　ふ　ふ
ふ　

おぐら月のうぐひすを
斗やおもひ出らん
ゆく末なのうて見ぬ月
前大寂寞たり
すゝまぬ春と詠ぬる
なるさも修羅の人なをうて　文考評

名月の海うの冷る田葉の小
明月や西にかゝれば虫の声　洒堂
ものゝ〳〵の如く〳〵ろん月見哉　如行
ふるうめのふらさうでやせんけん家　露沾
名月やそ座の下を人のわ　智月
　　閑杵

明月や更科うの里
明月や屋根切うるゝ雨
中切うるゝ雨
名月や草ろうふ
明月や老尼貴女
おろかなれ共月
明月や宝蔵の前
名月や四ツ人まで　蝉　婦木
老の身いとゞ貴
明月をまつて
仏参の留守
さゝげつゝ

涼風や
不玉
紀力
左柳
圃水
山蜂
凡国
需笑
李友
泥芹

二見まて　支考
芥子菊と　空牙
柿の名所　如真
山もるの　宗比
名月や　木枝
撓まで　利合
明すや　丹枫
明月や　野萩
飛入の　正秀
淀川の　汝章
船入の　景桃
待賢門　宗祇

家ゐ三年女よめわらべを
秘よとばくちうらなひをして
峡捻を　汨国
月うけや　馬莧
月うけや　里東
月うけや　牧童
淀川の　芭蕉
川よとも　仝
十六夜や　猿雖
ゆきよもや　閑力
更わやの　唯然
七夕

早人舎を圓くて涼しき
船形の雫まつくやかの新
あるうちもいつかる涼
名月や童子船の　圓きもち

立秋

栗わつや葉ふくうる雨の花
秋くるや庭ふくうる雲の峯

稲草

名もしらの花遍を　桔梗の蕾
細工するもかなしね　ねこねる骨の弱
まきる人　杉板の杖ふみ歩

涼葉
未濁
沽圓
乙州

素川
左次

御梅
陸友
閑々
ら道

一筋ハ　ぬた蛸の　ちろ〳〵　如月
弓圓くる比るれや　嵯峨さら
鵜舟や篝庵

百舎ろこ笑ふ茶花
きの船ろかなるのうな
桔のわるまへ物
鶏頭や庭作る時
鶏頭ろちる雲又
柳くや雨戸ま
苔ろまの
山人の

烏栗
支信

風麦
史邦
万平
芭蕉
至暁
雪芝

荷兮
桃妖
杉下

分くやかん蒼く青く萩
ほさくかう露あつて柳の
みどりさへ名残すくなく湯あみして
名頃ろ過ぎ行く秋風や

虫附き

きりぎりすの傍よりむくろ柄
竈うや彫くよりくろ柄
火の消て明くよりくろ柄
杜若や雪よりくろ柄
この中や形くよりくろ柄
蜻蛉や仮合一月の命
蜻蛉や何の味いりもせず

田上尼
園柿
風雲
其角

女
可南
北枝
正秀
杜若
探丸

鋪姫乃 後をひきとろ 石乃上
苔の雫よ 都さくらん 鋪井雲
ねけうよ 多くの秋の 蓄衆
雫の後を 見てゆく 河水 永峯
雁やそうよ 白川水 丈草
厚うねゆり 伊賀の名乃 ゐる
老の名乃 ゐて四十雀 芭蕉

秋風

秋乃雲や 二尾三尾 ほか
分ての秋や 何ものぞ 式之
何ものぞ 何ものぞ 支考
赤ん坊ゐる 秋の蚊 風國

園燕
九皐
猿雖

稲妻

一東
宗比
士芳
芭蕉

水實所萌

爲有
玄虎
西堂

炭焼ふ鮭猫よ

秋空や月みくろふ

宇愛
沾圃

生川草や

伊賀の山中ふの

松茸や

まつ茸やあらぬ木の姿のへうく

楓

淺黄の塀くよきれう村紅葉

鹿

屍をふむよ秋明のつ森や風のまる

窓ふさくよ森おろろ山ふの八

牲然
芭蕉

小鯉

風賊
一政

農業

起せ〳〵人〻迎ふる　芒高きの元
末の世や裡家もむさし稲こぐ　車庸
きぬ〴〵けるうちもみくま〳〵時雨稲　買山
　　如雪
　　芭蕉
　　乃紋
　　半従
　　支考
　　仝
　　惟然
　　木巴

[illegible]
その時や西八条の元の種　沾圃

　　蕪
八月草二百千日も宵なり　蕉雨
蕎麦木綿のやなぎ白菜の玉牡丹　濁子
　　支考
　　元峯
むら〳〵もやのこる山路の雪　文草
落ち〳〵ゆく人の菊
　　暮秋
蕎麦や荷前の初雁を数へて帰る　牡丹
幻住を敲ち人の来乃　恨み　乙州

行秋やうき我ひろけくる雲のゝ　芭蕉

雜秋

又六十海老はらやゝ殺(ハゼ)一ツ　之道

栗くちの小家に秋の雨　園友

わく〳〵客の旅宗仏　畦止

殘る蚊や言ふに付ある　口友

身あつ〳〵のこゝろの細き　荻子

文くゝ後や稲まく家の笑ひ　万平

柿の葉の焼こゝろ盛ん　落柿舎　宗波

本ゐこゝろる宿不敷肩こもの雷鼓

をかまへて能きやうやうを一筆て疎き夢

待ようけこゝろまこゝろ牛おのこゝろのれ

なこゝろこのひく雑ろうん

彼翁雜を枕〳〵て後こゝろ

をいうくこゝろまる

れく〳〵ものなう

稲作自や顔付こゝろ

冬こゝ部

時雨　傍書

古乃はの旅の枕用や古門守哉　野坡

ちくこゝまねく又来年よ　小枝

けふこゝろ人を雪よれ　芭蕉

一ちくれまこゝろ　傍佑

初くれ小満ち芋の葉の槇
平押ふみ又用くる時雨る
笹雪や竹てくれの笠更ち
掘雪も初よ芳野哉　物付ス
宿鮮の如てすゝけ障子
文ち我や注ぐ一しくれ
石ふし重て書物をぬらす時雨
柿色も日和もなしや初時雨
ちるくちう高くまで甲ふ庵附ク

馬莧
秋風
園指
空牙
為有
鶏口
秋荻
素川
里圃

深雪をそのこゝろまでのこりけり
日永ようこそあめのふりつゞき
神前ち勢日くるゝ時ふ水　沽圃

ちるくちう高くまで甲ふ庵附ク
初くれ小満ち芋の葉の槇
平押ふみ又用くる時雨る
笹雪や竹てくれの笠更ち
掘雪も初よ芳野哉　物付ス
宿鮮の如てすゝけ障子
文ち我や注ぐ一しくれ
石ふし重て書物をぬらす時雨
柿色も日和もなしや初時雨

北鯤
支考

深雪をそのこゝろまでのこりけり
日永ようこそあめのふりつゞき
神前ち勢日くるゝ時ふ水　沽圃

ちるくちう高くまで甲ふ庵附ク
初くれ小満ち芋の葉の槇
平押ふみ又用くる時雨る
笹雪や竹てくれの笠更ち
掘雪も初よ芳野哉　物付ス
宿鮮の如てすゝけ障子
文ち我や注ぐ一しくれ
石ふし重て書物をぬらす時雨
柿色も日和もなしや初時雨

馬莧
秋風
園指
空牙
為有
鶏口
秋荻
素川
里圃

深雪をそのこゝろまでのこりけり
日永ようこそあめのふりつゞき
神前ち勢日くるゝ時ふ水　沽圃

ちるくちう高くまで甲ふ庵附ク
初くれ小満ち芋の葉の槇
平押ふみ又用くる時雨る
笹雪や竹てくれの笠更ち
掘雪も初よ芳野哉　物付ス
宿鮮の如てすゝけ障子
文ち我や注ぐ一しくれ
石ふし重て書物をぬらす時雨
柿色も日和もなしや初時雨

北鯤
支考

深雪をそのこゝろまでのこりけり
日永ようこそあめのふりつゞき
神前ち勢日くるゝ時ふ水　沽圃

ちるくちう高くまで甲ふ庵附ク
初くれ小満ち芋の葉の槇
平押ふみ又用くる時雨る
笹雪や竹てくれの笠更ち
掘雪も初よ芳野哉　物付ス
宿鮮の如てすゝけ障子
文ち我や注ぐ一しくれ
石ふし重て書物をぬらす時雨
柿色も日和もなしや初時雨

馬莧
秋風
園指
空牙
為有
鶏口
秋荻
素川
里圃

深雪をそのこゝろまでのこりけり
日永ようこそあめのふりつゞき
神前ち勢日くるゝ時ふ水　沽圃

其角
桃隣
沾圃
芭言
万菊

士峯
露望

作樓
窓伯
雅然
根周

一逕
杉風
桃雖
乃笑

利牛
支考
智月
凡行
峰然
蟾生

芭蕉
利合

白雪

逝ゐけてあるじにあろふ千鳥哉　芭蕉
小歌ゆもる夜寒の雨の音　文車
入海や遠の雁金雲に啼　閑指
雛の小袖ゆかしみそめん　芭蕉
九月朔日を文月と云ふ生国気風ふ
故ふたる特ひとものうき水
うらうらと海月も寒き日和哉　杉風
同じくは遠き所の雪や見ん　荊
一塔ふ物白き朧をおもふべし　侍義
かくあらや脇をおもふて待夜の
越の門ふのこるうまたるべし　芭蕉

冬月
吟ものや門ふうつくしの月　里圃
あら猫のうけ出る朝やみぞれ　文車
行ものも帰ふまてかう炭ふる　小春
あら伝や門を出ふ内の同歌　支考
埋火
埋火や消ふ人宿ふ新ろう
庵しきふ来客を急ぐ火燵ふ　少年　桃先
自由さや月雪近ふ香ふ火燵　洞木
雪
初雪や門ふ入ふるうふ入ふる　其角

かくみや 月雪そ
雪にうそ公乃うく
結鶴宮ふとまる
やる頃や あくぬ人
ふくつめ草鞋を
行雁や 雪降う
思ひ乃雪や
梨割ふ降まる
仔賀大和うくる

神樂

歌舞伎座の葉も終まりぬ
鉾たてき

金夕菊　史邦
紙衾　支考
菅笠　圓吟
文章　陽和
妃カ

金魚鉢やうのふぐり
降うた干鮭 壺
娘入の門もとみう
猿を送うくまう

煤拂 府餅うる

猿やくまや嵐迫込
煤くまや山うなみの家
戈賣る 猪の
すそうやうくれて
猿廻や 初雪つれ
餅はまや かくう
降つまやめうねう

残香　梅若
笑迫　与茂
与兎　梓六
沾圓

三ノ間如　順次
紙衾

海棠の
歳暮 白雄
ちる花迄とどまるや 京妓
門松やまるまつて高くうつる
雪ちやくちやくと門てもらふ
猿も来のかうす
大年や猫のかうす
待ふもの
年ぬし市
手あやまち
門信ふ一ぱ
欄の輪のひ

写仏
雪良
里東
草士
車来
万平
李由
千角
正秀
紋子
猿雑

天秤もとりあへず
演劇
世の人間
のかく
けまじ
弱
盗人
余所
閑
第
載

雅然
芭蕉
文考
士芳
尚白
杷後
山彦

一ちまう法事で辞すべし　除夜の鐘　利合

雑冬

小屋風の菜の花　挽うす音や　斜嶺
井の水のそこくらふかき寒さかな　李下
植竹や山伏村の長はなみ　仙杖
霜ざくらをのこのけしや　圃仙
火焼ようの窓ちかく河水ゆたかに　雪芝
山住や猿の根のさきうるむ　コ谷
処女の人参の根のさきうるむ　沾圃
雪刈やみそさゞいの　杉風
澤蔵司部　附追善哀傷

涅槃

涅槃像かいてもらひし寺もなし　沾圃
落ちん金や敷もの今ぞ落散る　芭蕉
山寺や猫守ぬらす涅槃像　不撤
金屏のまくらをあてし涅槃像　山蜂

薩埵

薩埵やつゝまれてある井戸のやね　曲翠
薩埵や仏うまれて二三日　不玉
薩埵や乗逃したる鬼ぞなし　之色

骨仏

骨仏やつゝまれてある魂ぞなし　乱雪
骨仏やうまれてやうまれてやうまれ　太之

心伏も　坊うとをやくの鴉まうり　治風
甲成の　元大仏すゝ
うとうう　門風
深うて　命をいくつ
宿へくる　杖あ
暁か　年二百
かすみや　麻布の
その　親をありぬ
やまくらの　みの
月のゆく　稲妻の
さゝ島や　稲妻
治彩溝

雌然
支考

未笠
支梁

秋も　柿もぎまれ　ありく　紅葉　治圃
腸　八
勝　ささうて　月
行のあれ　のまくら
雑記
治圃　裏　如
閑ぼう　時
涼くも　ふ　月
ろうそく　三本
け　猫や　ちうちう
ものくあ　川越
まくら　仏

去来
智月
乙州
里圃
梅枝

食堂之夫 茅屋乃つれ 文き人

旅ごゝろ

送別

元禄七年の夏 五月雨の別れ 芭蕉

変わらぬ隣 家のつゝき 岩翁

別るゝや 柿給るうら 雅然

許さるゝ 女乃方 古ゐるも 似よ 梅の花 芭蕉

留別

洛乃 好ゐる 宿乃 時雨 文草

風ごゝろ 吹きの 半成 おくり 芭蕉

鳥のみや 古ゐ巣乃 別れ

果実のこゝろ あよ 汲けるとき

ふる郷の山 迎ふ 初ゆき

年ふりて 年ふのうら 雪の 木枯

梢つまやう 生垣 越人

旅ねなく ぼおろ 桜や 旅の 宿 乾徒

雪のあさ 花なる 小袖 公羽

十間ふも 小つゝみ 村の 風 許六

大名の 落うも わるお宝小 公

さ店の 路

くるまきる 菜うら せめ 宝の 姑

ほまち 立て 宝る 路小 岩良

猿山

明ぬのいとおもしろし　旅宿　我ら
おそうしつけてみな跡にのこり　史邦
田のもなどもも刈こみて住居のさまそ
文臺の宿もふけハ秋深し　大呂丸
我庵閑のうくつ旅のこころされ　沾圃
紫陽の風ひとのふうふ雲ゆきて　支考
そうそ求めんそ　今
おうそうそ宿をさそうれハ秋別
時乃朝のやうまうまうまうて
極そ霧る時やハ　梅うり小豆磨
その風や這ふふうふ　枕うり
そ寒三年ぬ雲ぬ墓ぬ　ゆり

武江ゟ野ゟ山ゟそ浮田の撫子
家ゟのうそ宿かりそ名をなのらまう
あく悪

千鳥
ゆあそそととととととと

月の橋　ねる
御社の　
撰物　
ゆふ
金風
有馬
和憲
十六
昨非
甘泉
之白
月尋
狩水
金聯